

みぬま通信 第72号

2017年10月



見沼たんぽくらぶのイベント

県民参加の秋野菜栽培

ふれあい農園づくり2号地(さいたま市緑区見沼)の県民参加による秋野菜栽培は9月9日(土)10時より晴天の下で実施された。予定では9月2日(土)であったが、台風15号影響による降雨のため延期された。参加者は県民を対象とした公募(申込多数により抽選)による応募者を中心に総勢117名であった。うち、両親等と共に参加の子供は41名と1/3を占めた。

本年の栽培品種は大根(青首総太り・青首宮重・聖護院)、蕪(中・小・赤)、小松菜、春菊、ビタミン菜、水菜の11種である。事前準備の一環として、9月3日(月)に蒔いた3畝の青首大根宮重は既に等間隔に発芽しており、種蒔のお手本となる。又、延期による雑草の成長も心配したが、事前耕耘の際地中残留のギシギシの根からの発芽があった程度である。



セレモニーの後、上記秋野菜の種蒔のやり方などの説明があり5班に分かれて作業が開始された。初体験の方々もおられたと思われるが、経験者や班担当者の指導もあり手際良く推進され、ほぼ1時間程度で終了となる。特に、子供たちは大人と共に種蒔作業を真剣にまた丁寧に行っていた。

今後3回の除草・間引きなどの重要な栽培作業を経て、11月11日(土)は収穫日となる。これら作業を充実させ、種蒔した秋野菜が立派に成長し、豊作を喜び合えることを期待したい。(若野 忠男記)

京芋・里芋・八つ頭・生姜栽培

今年で6回目の栽培が見沼たんぽ(緑区見沼)で始まり、農作業は5月1日から8月3日までの間に全6回行われました。場所は3年前まで3年間里芋・八つ頭栽培をしていた1号農地で耕地面積は約2000m²です。この農地は2年間景観作物の菜の花栽培をしておりました。



5月1日に植え付けた種イモの量と畝数は京芋10キロで4畝、里芋50キロで15畝、八つ頭30キロで13畝、生姜40キロで9畝。5月29日は埼玉県企画財政部新規職員等10名が社会貢献活動研修として除草作業に参加。

6月9日(8日が雨で順延)は除草終了後に鶏糞180キロと化成肥料80キロを施肥。6月22日と7月13日は社会福祉法人ななくさ大谷作業所の皆さんが除草作業に協力。8月3日は除草作業を終了後、生姜の一部を収穫。

全6回の農作業は8時に集合し2~3時間で予定どおり終了いたしました。今までの栽培経験のなかで植え付けから除草まですべて完璧にこなしたのは今回が初めてです。

今年は梅雨時の雨が少なく芋の成育が心配されましたが8月末現在茎は太く葉も大きく育っています。今後も天候に恵まれ大収穫になるよう期待して、例年どうり福祉団体に寄贈を予定しております。

(三上 雅央記)

見沼たんぼくらぶのイベント

第110回見沼塾 見沼縁の面白いモノ三つ

—寿能泥炭層遺跡と女體神社の鳥居と虎皮裙—

第110回見沼塾は6月10日(土)14時より、さいたま市立大宮図書館にて下村克彦先生(元さいたま市立博物館長)を招き、19名の参加者を前に開催された。「面白いモノ」は見沼に関わる寿能泥炭層遺跡・氷川女體神社の鳥居・庚申塔と虎皮裙(こひくん)等の三項目であった。

(1) 寿能泥炭層遺跡

本遺跡は、大宮区寿能町2-407ほかである。その報告書は埼玉県教育委員会によって「寿能泥炭層遺跡調査報告書」(1982・84年)として刊行されている。本遺跡の成果は海水面の変動・花粉分析・考古学的な成果が注目されている。この地域は暖温帯に属しその植生・遷移の基本はススキ・チガヤ群落ーアカマツ群落ークヌギ・コナラ群落へ、更に極相林であるシイ・カシ群落へと遷移する。すなわち、照葉樹林帯を形成するが、この



発掘調査による花粉分析では潜在植生である照葉樹林の要素が欠けて、クリ・クヌギ・コナラ類を主体とする、いわゆる二次林的であったことが判明して、縄文時代には現在の植生より種類が豊富であったことを示している。その後の人間活動による森林に対する様々な手入れによって現在のような植相へと変化したと考えられる。照葉樹林帯の気配は無いが、落葉広葉樹林の環境を維持しつつ、土器・木器(漆塗りなど)の豊富な出土などがあることから、受け入れられた照葉樹林文化がこの地にあったことを物語っている。

年代測定には放射性炭素(炭素14)は用いられるが、年縞堆積物での年代測定は精度も高く有効であるとされる。福井県若狭町の水月湖の7万年

間の年縞堆積物は2012年のパリでの世界放射性炭素会議総会において地質学的年代決定の世界標準となった。今後これによる年代測定での新たな実態把握が期待される。

(2) 氷川女體神社の鳥居

本神社は見沼の傍で東向きに立ち、鳥居は台地の端部に建つが、この場所に造られたのは古く見沼の干拓と「盤船祭」が開催された享和年間になる。それ以前は沼岸より200間程見沼の中にあったとの記録がある。鳥居は「入口」つまり「迎える」ことを主目的とする。神(まれびと)の原像は共同体の外部から訪れ、歓待することによって恵みを齎すもので、うみ(海・湖・沼)から神を迎えることにあったと推定される。現在の主祭神は奇稻田姫命であり出雲系の神であるが、縄文時代は沼と関わる「恵みと災厄を齎す精霊」、弥生時代は恵みの中心を稻作とした「農耕神」、更に古墳時代に「出雲系神々」を祀り現代に至っていることを意味している。

全国各地の神社には、複数基の鳥居が建つ内、水中・岸・崖上にも鳥居が建つ社はかなりあり、厳島神社は海中に建つ事例として挙げられる。

(3) 庚申塔と虎皮裙

庚申塔は青面金剛像を祀り三猿を掘ってある石塔である。庚申塔は江戸時代に盛んに行われた60日毎開かれる庚申の夜の信仰行事(体内に居る三戸(さんし)という虫が庚申の夜本人が眠る間に天に昇り罪を天帝に告げられ早死しない為、眠らず身を慎む)として仲間方(又は集落毎)と共に徹夜で庚申の祭事を営む信仰対象である。

一方、虎皮裙は明王部・天部が着用する虎皮製(豹皮製のものは豹皮裙)の裳である。青面金剛は天部に属すので、虎皮裙を着用する。見沼周辺のさいたま市・川口市には石造庚申塔が多数あるが虎皮裙着用例は「稀」のようで、その着用例は7体あるという。これらの彫像については剥落しているものも多いが、虎皮裙か・豹皮裙か、又は布だけかを探索するのも野外活動の楽しみに追加されようし、また、仏画・仏像本から虎皮裙と豹皮裙を見付け、また、その記述の内容を探すのも楽しみとなるだろう。

(若野 忠男記)

見沼たんぼくらぶイベント

第112回 見沼塾 見沼たんぼの昆虫

開催日：2017年7月9日（日）

講師：牧林 功氏（元埼玉昆虫談話会会長）

助手：鷺 大淇氏（埼玉昆虫談話会会員）

参加者：32名（うち子ども6名）

集合場所の大宮第二公園管理棟から香りロードを通り、大和田緑地公園への道程であった。いきなりニイニイゼミを捕まえた。

シーズンの一番先に鳴きはじめる小型のセミである。それだけに、声は聞こえても姿を見ることは難しい。幸先の良いスタートが切れただけあって、今回の観察会で見られた生き物はなかなかの顔ぶれであった。

ヤマトシジミやモンシロチョウ、セイヨウミツバチ、クマバチ、シオヤアブなど馴染みの虫たちを捕まえたり、お話を聞いたりしていると、先行していた参加者から歓声が上がった。ナナフシモドキを捕まえたのだ。子どもの手と比べるとその大きさが分かる。「連れて帰りたい」という顔をしていたが「飼育するには大量の葉っぱが必要よ」と教わったため、じっくり観察したあと、無事に元の場所にお帰り頂いた。

大物との出会いの興奮が冷めやらぬまま進ん



ナナフシモドキ：この日一番の大物！

で行くと大型の黒い蝶が前方に舞っていた。黒くて大型となると、クロアゲハ、モンキアゲハ、ジャコウアゲハなどが思い浮かぶ。すかさず参加者のおひとりが捕獲し、傍にいた皆で観察する。後ろ羽から下に伸びる突起（尾状突起）がない。ナガサキアゲハの♂であった。

ここでまた歓声が上がる。目の前の水辺にカワセミが出現したのだ。

大宮第二公園に戻り、鷺助手が手掛けられた資



料が配布された。ご自身の興味の対象であるハチの生態について、そして歩行虫（地面を歩いて移動する虫）について詳しく書かれている。ご参加の皆さんには嬉しいプレゼントであろう。

ハチは蜜を集める種類だけでなく、狩りをする肉食の種類もいる。高いところに巣を作るもの他に、公園の「あずまや」などの柱やベンチにあ



カワセミ：
皆の歓声
と注目を
一身に浴
び、その
美しい羽
根を見せ
てくれた

いた穴を利用して巣を作るものもいる。その実に多様な生態に、改めて驚かされる。

歩行虫の類には、いわゆる「掃除屋」がいる。彼らが多い場所には死骸があるということだが、裏を返せば、生き物が確かにそこに生き、生命を全うした、という証でもあるのだ。

この日は昆虫やカワセミなど、多くの宝物を見つけた。その中で、小さな肩に虫かごを下げ白い補虫網を揺らして駆ける子ども達の姿もまた、大切な宝物だと思う。

（木戸口 美香記）

見沼たんぽ水彩スケッチ紀行

氷川神社第1鳥居

J R さいたま新都心駅を降りて旧中山道を北に行くと、「武藏国一宮」と書かれた大きな石柱と氷川神社の第一鳥居が見えてくる。これから第二鳥居を経て神域に入る第三の鳥居に至る真っ直ぐの参道は約 2 km の全国一の長さといわれる。

参道の両側にはケヤキ・シイ・エノキ・杉など 20 余種の樹木が 600 本以上植えられており、歩道も整備されて参詣者や地域市民の人々に広く親しまれている。

絵と解説 八木一郎



見沼代用水東縁に架かる締切橋（見沼自然公園の東北端）

1629 年（寛永 6 年）関東郡代伊奈忠治は大間木と木曽呂の間に八丁堤を設けて見沼溜井を造成した。しかし浅い溜井のため水害が多発したので、坂東助右衛門は幕府の許可を得て片柳から野田に通ずる「締切堤」を築き、52 町の新田を造成、「入江新田」を作った。現在の見沼代用水東縁に架かる締切橋はその時の名残といえる。

この「締切堤」は用水源としての機能が低下したため、同じく坂東家によって堤を撤去、見沼代用水を利根川から引いて新しく加田屋新田を開発した。ここは船着き場として栄えたという。なお片柳村と野田村の水の取り合いから、「代用水の利用は片柳のみ」として締め切ったのがはじめとの言い伝えも残されている。



片柳の筆塚（見沼区 片柳）

県道 214 号線（染谷新道バス停）から南へ徒歩 8 分の街道沿いに建てられており、華道（正風遠州流）の大家守屋巖松斎の事蹟をたたえる筆塚で、花塚、歌碑、灯籠等がある。

守屋家は片柳村の名主を務めた家柄。巖松斎は江戸時代後半の文化文政期に、華道（正風遠州流）の大師匠として活躍、書道にも優れ、門人は 3 千 5 百人余ともいわれ、関東一円は勿論越後からの入門者もおったという。

見沼たんぽくらぶ会員作品展

お月見（十三夜）

作者 平沼計一

10 月上旬「見沼くらしつく館」を訪れた時、旧坂東家の縁側にお月見のお供え物が見事に飾られていました。穀類、豆類やお酒などが整然と飾られていたことに感動しました。

「十五夜」の仲秋の名月に続いて、後の「十三夜」も栗名月の名でお月見をして神様へ収穫の恵みを感謝するという日本独自の風習は、これからも絶えることなく続けられると嬉しく思います。



見沼たんぽ探訪記・見沼たんぽくらぶのイベント

歴史の刻む大宮公園

7月に入って第2日曜日、梅雨期の真っ最中ではあるが快晴の日が続き、街の中に居ると、灼熱の太陽に身を焼き焦がされてしまいそうである。大宮公園に緑陰を求めて樹の下に入ると、ボート池の方から冷たい風が流れてき、街の中の暑さと比べると、まるで別世界だ。

歴史的には明治18年（1885）9月12日に開園しており、北足立新座郡役所や大宮町役場を経て、明治31年（1898）4月に県が管理する公園になった。大正10年（1921）、日本最初の林学博士である本多静六氏の策定した「氷川公園改良計画」により、大規模な公園整備・拡張が行われている。園内にはスポーツ施設



を配慮し、明治神宮外苑をモデルに野球場、運動場、桜の植樹等の整備を図っている。

今では「桜の公園」で通っているが昔は「松の公園」と言われ、赤松の林が美しかったという。夏目漱石、永井荷風、森鷗外、正宗白鳥・・・等、多くの文学者が訪れており、正岡子規は大宮公園の印象を句稿「寒山落木」や隨筆「墨汁一滴」等の中で著わしている。また野球場では昭和9年（1934）、ベーブルースやゲーリックを擁する米選抜軍が日本軍と対戦、昭和28年には高校野球南関東大会で、当時の佐倉一高の四番打者・長嶋茂雄が大ホームランを放っている。

現在、この県営大宮球場では第99回全国高校野球選手権埼玉大会が開催されており、公園内のベンチに座っていると、熱戦中の球児を応援する大歓声をはじめ、太鼓やラッパの音などが、風に乗って聞こえてくるのでした。（召田 紀雄記）

コスモス栽培と園児の花つみ

コスモスの花は色も豊富で、秋になると私たちの目を楽しませてくれます。その可憐な姿は秋の風景に欠かせないものといえるでしょう。

そんな風景を見沼田んぼで造ろうとコスモス栽培を始めました。場所は緑区見沼（昨年まで里芋・八つ頭栽培）で面積約1200m²です。

栽培は畑に種をまく1~2週間前に除草・苦土石灰・化成肥料・耕耘などを土作り、6月9日に種まき機ごんべいで播種、その後順調に育つように草刈り機ハンマーナイフ等で数回の除草を行ないました。

コスモス畑は8月下旬~9月下旬にかけて、桃・白・赤紫色の可愛いらしいコスモスが一面に咲き乱れる絶景となりました。散策している人が写真を撮っている景をたびたび見つけられました。

園児の花摘みは8月29日に「こぐま保育園」、9月11日に「大古里育ちの森幼稚園」が参加して行われました。

園児達は見沼田んぼのコスモス畑で花を摘んだり、虫を追っかけたりしながらはしゃぎまわっ



ていました。参加した園児は「いろんな色の花がとれて、楽しかった」「バッタもこんなにいっぱいとれたよ」などと話していました。

来年のコスモス栽培は見ごろが9月下旬になるよう播种の時期を一ヶ月程遅らせる予定です。

（三上 雅央記）

見沼たんぽの仲間たちNo.43

大宮シニアライオンズクラブの事業紹介

大宮シニアライオンズクラブ

前会長 田母神 昭八

我が大宮シニアライオンズクラブが野菜づくりに参加して8年になりました。その間、ご指導ご協力を得て環境保全に努めてきました。

特に秋野菜づくりは種子まき・除草・間引き、そして11月の収穫は実に楽しいもので、沢山の大根・カブ・春菊等々頂き、家族・そして友達に差し上げ、喜び合っています。



<市民の皆さんと共に>

当クラブ活動の一部を紹介させて頂きます。ライオンズクラブ国際協会 330C 地区に属し、1995年12月に結成され、今年で22年になります。メンバーアー16名で1人2役・3役を担当し奉仕活動に励んでおります。一緒に活動しませんか？ 県下に幅広く入会募集しております。

以下、主な事業についてご案内致します。

§ 例年上演される武藏一宮氷川神社 薪能の事前学習として「大宮薪能鑑賞講座」を提供しております。 今年は第22回を迎えます。



<“能”金春流の解説>

§ 「子育て中の母の集い」お母さん方が子育ての悩み、喜びを話し合っています。提供して今年で第19回目になります。



<グループ発表>

§ 小さな善意や奉仕活動を続けている子ども達にスポットをたててあげたい。

そんな趣旨で継続してきた「善行表彰」を市内37校の小学校を対象に、今年は15回目となります。



<表彰式>

§ チャリティカラオケ歌謡大会を主催し、東日本大震災復興・青少年健全育成支援活動として、今年第6回となります。



<優勝（グランプリ）他の皆さん>

見沼たんぼを支える農家さん

星野昇さん

高速埼玉新都心線と第二産業道路が交わる辺り、新都心の高層ビル群を遠景にして四季折々の田んぼが広がる風景が見られます。さいたま市のシンボル景観の一つとも言われる、ここ中川地区の用排水維持管理組合長を務めているのが星野昇さんです。

お父さんの代までは専業農家で、小さい頃からずっと農作業を手伝ってきました。当時はすべて手作業。田んぼは米と菜種の二毛作で、菜種を収穫した後、6月に田植え、10月に稲刈り。万能（鍬の一種）で一つひとつ株を起こしてすき込んで肥料にしたそうです。機械化の進んだ今と較べ、大変な作業だったと思いますが、日に焼けた顔をほころばせながら、「農業は楽しい。泥いじりは楽しい。」と話す星野さんのきらきらした笑顔は少年のよう。

しかし、どんどんと開発が進められ、農業だけでやっていくのが大変になった時代背景もあり、昇さんは市役所に勤めます。が、その後もずっと仕事のかたわら両親を手伝い、農地を守ってきました。退職して7年ほどになる今は、その農地で「自分の楽しみとして」米や野菜を作っている



(星野昇さん)

との事ですが、米はかつて天日干しの「こだわりの米」としてテレビで紹介されたこともあったそうです。収穫物は特に販売はしていません。身内や知人に分ける他、地域の行事の際などに提供しています。

しかし今、この中川地区も高齢化が進み、毎年田んぼが減っているそうです。田んぼは用水によってつながっています。ぽつんぽつんと点在することになると、用水や排水の維持管理が難しくなり、結果としてさらに田んぼが減っていくことになります。

最近では、農業に注目する若い人や非農家の人も増えているようですが、米作りはたとえ手植え・手刈りで天日干しをしたとしても、その後の収穫（収穫を取り除いて玄米にすること）など、どうしても機械が必要で、それをどうするのか。



(もうすぐ収穫をむかえる星野さんの田んぼ)

また実際には、ある程度の面積を耕作するには、田植え機や稲刈り機、乾燥機など、年に一度しか使わなくても農機具が必要不可欠となります。個々に機械を揃えるのは大変です。乾燥機や収穫機などを共同で使える仕組みができれば、米作りに関わろうとする人が増えるのではないか、と星野さんは話されます。

今年も実りの季節を迎える頃となりました。こんな身近にあるこの豊かな風景と、これからも共に暮らしていくために出来ることは何か、私たちも考えていきたいと改めて思いました。

取材：島田由美子・高橋いずみ

文責：高橋いずみ

見沼たんぼくらぶのイベント案内

第8回見沼たんぼ清掃ボランティア

11月3日（金・祝）10時～12時

市民の森正門集合、解散

老若男女どなたでも参加できます！

- 見沼たんぼを貫流する芝川周辺を散策し、ゴミを收拾します。

申込み：当日、集合地にて9時30分～10時受付

参加費：無料《粗品 見沼たんぼの恵み進呈》

交 通：JR宇都宮線土呂駅東口から徒歩約10分（見沼代用水西縁・川島橋の東側）

斜面林の体験学習～落葉かき

12月10日（日）9時30分～12時、
さいたま市立大宮体育館正門集合

- 見沼たんぼ最大の斜面林&谷地「大和田緑地公園特別緑地保全地区」に入り落葉かき実習

申込み：当日、集合地で9時～9時30分受付

参加費：無料

交 通：東武アーバンパークライン（野田線）大和田駅から徒歩約20分

市民と行政の協働事業

第14回さいたま市みどりの祭典

開催日：10月21日（土）～22日（日）

時 間：10時～16時

（ただし、日曜は15時30分まで）

場 所：市民の森芝生広場

（入退場自由）

- 「みどりに親しみ、みどりから学び、みどりを守り育てましょう！」というスローガンの下、来場者が「作る」「調べる」ことを主体とする市民参加型のイベントです。

日曜には、誰でも参加できる青空ヨガや野口喜広のオカリナ演奏もあります。

交 通：JR宇都宮線土呂駅東口から徒歩約10分（見沼代用水西縁・川島橋の東側）

または、東武アーバンパークライン（野田線）大和田駅から徒歩約20分

問合せ：祭典実行委員会会長・小野 達二

TEL&FAX（048）683-1764

見沼たんぼくらぶ入会を勧めます

見沼たんぼをもっと知りたい

見沼たんぼの自然にふれてみたい

見沼たんぼで何かしたい

見沼たんぼの保全に協力したい

そんな皆さまをお待ちしています！

- 季刊『みぬま通信』を郵送します。

4月・7月・10月・1月発行

- 埼玉県土地水政策課の支援のもとに、見沼たんぼ地域の里やまで、様々な体験事業を展開しています。子どもから年寄まで気軽に楽しめるイベントです。

○…見沼ふれあい農園づくり

農地はスタッフが耕運し、畝づくりを済ませ、種蒔き・植付から除草、収穫までの作業です。

「京芋・里芋・八つ頭栽培」や「秋野菜栽培」などを楽しみ、福祉施設にも寄贈しています。

○…自然観察ハイキング

自然観察指導員のガイドで、年4回、史跡を巡りながら花や鳥など見て回ります。

○…見沼たんぼ清掃ボランティア

○…斜面林の体験学習

○…見沼塾—見沼の自然や文化を学ぶ講座

- 年会費 個人（同居の家族単位）・団体・企業とも1口￥1,000（団体・企業は3口以上）

みぬま通信第72号

発行日 平成29年月10月1日

発行所 見沼たんぼくらぶ

〒337-0053 さいたま市見沼区大和町

1-2124-3 小野方

TEL・FAX (048) 683-1764

E-mail t.ono@axel.ocn.ne.jp

URL <http://minumatanbo.web.fc2.com/>

© 2017 Minuma Tuusin